

『後悔』

作者 浅羽 一

血まみれの彼女は泣いていた。真っ赤な手でぬぐわれた頬には血がこびりついていて、こぼれ続ける涙の色を変えていた。

僕も、泣いていた。彼女の涙に誘われたのか、瞳からは涙が溢れて止まらなかった。ようやく、気付いた。そして信じられた。僕は、本当に彼女を愛していたのだ。今の今まで曖昧だったものが、この時になって初めて胸の中にすでに存在していた事を知った。手から柄まで紅く染まったナイフが落ちた。フローリングに飛沫が散る。僕は自分の行為の愚かさを呪い、後悔し、恐怖した。今さら遅いと分かっている、諦められない。今なら彼女に愛しているとと言えるのに。

彼女は泣き止まない。僕も泣き止まれない。失いたくない、離れたくない、無くしたくない、それなのに…。

…血が、止まらない。



生まれて初めて壊したものは、少なくとも覚えている範囲で言えば、幼稚園で同じ教室の少女から貰った首飾りだった。折り紙を細く切って輪にしたものを幾つも繋げ、丸い画用紙にクレヨンで描かれた似顔絵を付けたそれを、僕は首から下げたまま彼女の目の前で引きちぎった。折り紙の柄や似顔絵の出来映えなど覚えていないのに、それを壊す為に力などほとんど要らなかつた事だけは妙にはつきりと記憶している。突然の出来事に、恐怖に引きつったような顔で号泣した少女の名前は、「みきちちゃん」と言った。笑った時のえくぼと、日替わりのリボンが印象的な、可愛らしい女の子だった。そして僕もまた、泣いた。せつかく貰ったプレゼントが、壊れてしまって、あまりにも悲しくて、鼻水を垂らして泣きじゃくった。僕は、みきちちゃんの事が好きだったのだ。

それから何度と無く、似たことは続いた。理由なら分かっている。僕は、自らを信じられない人間なのだ。

例えば、大好きな玩具があつたとする。だが、果たして自分は本当にそれを大切に想っているのだろうか。錯覚や、その場限りの興味だけでなく、ちゃんと心からそれに対して「大好きだ」と言う気持ちを抱いているのだろうか。

そんなこと、分からない。なぜなら、人は時に己の心すら見失ってしまうものなのだから。少なくとも、かつての僕は「誰もそんなことは分からないものだ」と考えていた。

だからこそ、確かめてきたのだ。何よりも、それが本当に自分にとって大切で、自身が本当にそれに対して愛しさを抱いていることを、信じる為に。

失った時に、心が痛ければ、それはつまり気持ちがあつたという証拠なのだから。異常だなんて思っていないなかつた。酷い事だとも考えていなかった。むしろ、ずっと誠実なんだとさえ感じていた。だって、僕はいつもただただ相手への正直な気持ちこそを大事にしたかったのだから。嘘を吐き、誤魔化しを顔に張り付けて生きていく方が悪いことだと感じていた。

自分が普通でないと分かったのは、コロを殺した時だった。

日課の散歩から帰ってきて、餌をやっていた時、ふと思った。コロは可愛い。子犬の時に僕が拾ってきたから、コロはずっと愛犬と言うよりも弟みたいな存在だった。けれど、それは紛れもない僕の本心なのだろうか。雨の日も風の日も散歩に出掛けているのは、母親に命じられたからだけではないのか。乱暴な犬に吠えられて震えているコロを抱いて守ろうとしたのは、父親にそうするべきだと言われていたからだけではないのか。

僕はどうしても、確かめたかった。自分にとって、コロが本当に掛け替えのない存在であるのだと。

衝動的に掴んで振り下ろした裁縫用の大きな鋏は、一瞬の抵抗の後、生々しい音を立ててコロの白い背中に突き刺さった。暴れたコロが僕の左手を噛んだが、僕は構わず鋏を握った右手を振り上げて、もう一度、コロの横腹を刺した。そしてそのまま、思い切り鋏を動かして傷口をかき回した。犬とは思えない、まるで嘔吐する人間めいた唸り声を断末魔の声にして、コロは死んだ。もう、何度呼び掛けても、立ち上がるどころか、まばたきをする必要も無かった。

僕は、ちゃんと泣いた。大声を上げて泣いた。左手からは血が流れ出していたが、そんな痛みを気にする事もなく泣き続けた。人に噛みついて大丈夫なように、怯えるコロを励ましながら病院の予防接種に連れて行ったのは、僕だった。

左手の治療の為に病院へ連れて行かれた僕は、続けて別の病院に行き、そのまま施設に連れて行かれた。「これ以上、このまま普通の生活を続けさせるよりも、一度きちんと療養をした方が良い」と言うことらしかった。母も父も、僕を叱らなかつた。二人はただ、泣いていた。己の行為が異常であるのだと、その時になって初めて理解した。

それから僕は施設で暮らし始めた。時折、両親が会いに来てくれて、その度にお菓子や絵本など、色んなお土産を持ってきてくれた。その度に、僕は二人が帰った後でそれらの全てを壊して、捨てた。そしてその度に泣いて、後悔した。いつしか、二人がお土産を持つてくることはなくなっていた。

結局、僕は治らなかつた。どれだけ頭で理解していても、どうしても衝動を抑えられなかつたのだ。

しかし、だからといって何も変わらないままでは、一生まともな生活に戻れないだろうと言うことも分かっていた。

詰まる所、僕は諦観を学んだのだ。愛を信じるとか、信じないとか、大切に想うとか、想われるとか、そう言った一切を頭の中から除外する。つまり、嘘を吐き、誤魔化しを顔に張り付けて生きていくと言うことだ。これは、考えていたよりも遙かに簡単で、また楽なことだった。淋しさにも、すぐに慣れた。

ただ、一つだけ問題だったのは、同時に「生きていく」という事への実感まで希薄になってしまった事だった。けれど、それも詮無きことだろう。僕は普通の中で生きていく為に、自らの生き方を捨てたのだから。それでも死のうとしなかつたのは、単に「死にたい」とも思わなかつたから、理由などそれだけだった。…いや、それだけだったのだと、思う。

閑話休題、いずれにせよ僕は、少なくとも表面上は、普通の人間として成長した。もう誰も、僕を異常だとは言わなくなつた。友人や、深く付き合える相手も、また皆無だつたけれど。

高校卒業と同時に僕が家を出たのは、とても自然な流れだった。と言うよりも、本当な

ら義務教育を終了すると同時に一人になりたかったのだが、両親がそれを許さなかったのだ。その真意は、今となっても分からない。

一人暮らしを始めた僕は、何よりも生活をしていく為に必死だった。

馬鹿でなければ、優秀とも言えない、性質に比してあまりにも平凡すぎる能力しか持ち得ておらず、その上に最低限度の人間関係しか構築出来ないと言う欠陥さえある僕にとつて、出来る仕事など限られていた。勿論、給料の良い仕事であるはずがない。

三ヶ月という短い期間で幾つもの仕事を転々とした後、四ヶ月目に就いた仕事は深夜営業のネットカフェの店員だった。

時に例外もあったけれど、必要以上に人と接しなくて済むその仕事は、僕には向いているみたいだった。来店する客の多くが、そもそも他人と接したくないと考えているらしいというのも、理由の一つかも知れない。今度こそ、僕は仕事を辞めなかった。

真子と知り合ったのは、それからさらに四ヶ月ほどが経過した頃だった。

誤解を生じさせない為にあらかじめ言っておくが、最初に声を掛けてきたのは彼女の方だった。僕はと言えば、他の客に接する時と同様に、淡々と業務をこなしていたのだから。

「ねえ」

彼女はいきなり話し掛けてきた。「この仕事、楽しい?」。受付のカウンターに肘を突いて、僕の方に身を乗り出して。「私は、全然楽しくない」。肌は、顔だけでなく、襟首の辺りで綺麗に切りそろえられている髪の毛の先を越えても赤く。長袖のシャツは、左側の裾だけがだらしくスリム・スカートの外側にはみ出ている。見るからに酒に酔っていた。

僕は考えることもなく酔っぱらいに対するマニュアル通りに対応しようとした。「すみません、お客様」。それを制したのは、やはり彼女の質問だった。

「どうすればいいと思う?」

意味が分からなかった。

「ねえ、どうすればいいと思う?」

しかし彼女は再びそう繰り返した。彼女が「ねえ、ねえ」と左右に頭を振るたびに、とろんとした垂れ目の上に掛けられた桃色の縁の眼鏡が、丸い鼻の頭にまでずり落ちた。

僕は仕方なく「どうしましょうか」と頭をひねった。本音はいつでも良かった。

「選択肢は、二つよね」

「二つ?」

「そうよ。やるか、やらないか。人生なんて、それだけよ」

急に自信満々の態度で言い切った彼女の姿に、僕は何となく奇妙な可笑しさめいた感じを抱いた。だからなのだろう、この会話に付き合っても良いかなと思っただけ、客も少なくて暇だったからと言う理由を除けば。「やるか、やられるかと言う場合もありますよ」。

僕の返事に、彼女は一瞬だけきよとんとした後で、「それもそうね」と笑った。目元をゆるめ、両頬を真横に引いて歯を見せる仕草は、少なからず子供じみていたけれど、彼女の雰囲気にとっても良く合っていた。

「あなたは、どうしたいんですか」

「私?」

「そうです。やりたいのか、やりたくないのか、それともやられるのを待つのか、どれが良いんです?」

「私は、そうだなあ…」

そこで彼女は何かを思い巡らす風に視線を彷徨させた後で、「…出来れば、やられないことを待つのが、良いかな」と言った。

「それじゃ、自分で選択をする意味があんまり無いじゃないですか」

「ま、確かにそうなんだけど」

「でしょ？」

「だったら、あなたなら、どうするの。何かで迷っているとして、あなただったら、やる？ やらない？ それとも、待つ？」

「そんなの時と場合によるじゃないですか」

「それはそうだけど。でも、平均して」

「平均って…」

あまりと言えば適当な言い草に苦笑しながらも、僕は考えた。それも結構、真面目に考えた。そして、その末に、結論を出した、ずいぶんと抽象的な回答ではあったけれど。「僕なら、少なくとも『待つ』って事は、あんまり選びたくないですね」。

彼女は問うた、「どうして」と。

僕は気取った物言いになる事を僅かに照れ臭く感じながらも、思ったままを言葉にした。「目に見えない結果を不安がっているよりも、目に見える結末に泣く方が、ちよつとでも早く先に進めるようになると思いますから。だから、やるにせよ、やらないにせよ、自分の方から決めたいですね」。

彼女は、口を半開きにした状態で数秒ほど沈黙してから、「それってつまり、やるか、やらないか、って事？」と言ってきた。

僕は即座に「そうですね」と頷いた。

その途端、思い切り呆れた顔をされた。「それじゃ、私が最初に言っていた通りじゃない」。反論する気はなかった。

彼女は軽い溜息を吐いてから、かすかに声の調子を低くした。「でも、あなたの理屈で行くと。私、泣くことになるのよね」。

「そうとは限りませんけど…」

「だけど、この会話が原因で取った選択で、泣くことになる可能性はあるのよね」

「それは、まあ」

「だったら」

そこで彼女は言葉を切ると、不意に悪戯っぽい目つきになって言った。「それで私が泣くことになったら、責任取ってくれる？」。

「責任って…」

僕は思わず言葉に詰まる。すると彼女は「ほら」と鼻を鳴らして、速射砲のごとく言葉を紡ぎ出した。「男ってみんなそうよね結局は都合の良い時だけ優しい振りをして後になつたら僕は何も知りませんよ大体初めから関係なかったんだからとかってー」。

「分かった。分かりましたよ」

弾雨から逃れるには、最早そう言うしかなかった。彼女の表情が一転、愉快そうなものへと変わった。僕は抵抗することを諦めた。

「じゃ、責任を取ってくれるのね」

「責任を取れるかどうかは分かりませんが、もしも、あなたが泣いていたなら、慰めるくらいはさせてもらいますよ」

「：何か、中途半端ね」

「すみません」

「ま、良いわ。だけど、絶対だからね」

そして彼女は笑う。それを見た僕は、「きつと歯磨きを欠かしたことなんて無いんだろうなあ」と、そんなそれこそどうでも良い事を漠然と思ひ浮かべていた。

「決めたわ。私、やることにする。良いわよね」

「あなたが決めたんですから、良いと思いますよ」

と言うよりも、本音を言えば、良いも悪いも判断など出来るはずがない。けれど水を差さない方が良いだろうという事だけは何となく感じ取っていたので、僕は彼女の言葉に首肯した。

「ありがとう」

彼女はにっこりと笑った。だから僕は「どういたしまして」と言いかけて……気付いた。

「ちよつと、あの」。彼女はさっさと店を出て行こうとしていた。

「え、それだけですか」

思わずそんな聞き方をしてしまった僕に、即座に問われた意味を悟ったらしい彼女は「ああ、今日はもう帰るから。もう良いの」とだけ言い残し、軽く手を振って入り口の扉の向こうへと消えた。僕にはもう、啞然としながら見送るしかなかった。まさか、愚痴をこぼすだけこぼして帰るとは思わなかった。冷やかしにもほどがあるだろう。

「：凄い人だったな」

これが、真子に対する僕の第一印象だった。

結局、真子がこの時、何の話をしていたのか、僕は後になって彼女本人から聞かされる事になる。偶然に見てしまった——本人はそう言っていた——当時に付き合っていた彼氏の携帯電話のメールから、浮気を疑い、けれど確証はなく、どうすればいいのかわからなくなつて思わず酒に走つてしまつていたらしい。しかし、彼女は僕との会話が原因で——これも本人が言っていた——彼氏の浮気を真っ向から追及する道を選択した。そして結果的に、残念ながらそれが事実であつたと知らされ、喧嘩し、挙げ句の果てに一方的な別れを突きつけられることとなる。

彼女が泣きながらこの話を語つたのは、僕が働くネットカフェの狭い個室の中だった。

面倒な客に呼び出された風を装つて彼女の下へ行つていた僕は、その時、頭の半分で「早く仕事に戻らなければ」と思いながらも、もう半分では「約束だったから」と考えていた。とは言え、それで自分に何が出来るのかなどまるで分からず、結局はただただ話を聞いて相槌を打ち、「君は悪くないよ」とか「大丈夫だよ」とか、そんなありきたりな言葉を合間に繰り返すことしか出来なかったのだけれど。身の程をわきまえない口約束など、するべきではなかったと、真剣に辛そうな彼女の涙に少なからず後悔した。

だからこそ、さらに後日、再び店を訪れた彼女が、それも笑いながら、僕に対して「この間はごめんなさい」と、その上に「良かったら、また話を聞いてくれる？」と、自らの携帯電話の番号とメールアドレスを差し出してきた時には、本当に驚いた。と言うか、何故だと思つた。一瞬、「何かの悪徳商法か」とさえ疑つた。実際、この時の僕の顔にはそ

んな想いが多少なりと表れていたのだろう。彼女はその笑みに僅かな苦みを浮かべて、「逆ナンパとでも思っておけば良いじゃない」と言った。やはり気の利いた返事の一つすら紡げない僕には最早、その場を満足に繕うことも、お断りの態度を示すことも出来ず。一体、僕はどんな顔をしていたのだろう。眼鏡の奥にかすかな無理を残していたものの、それでも僕を見て笑う彼女は、楽しそうだった。

勿論、このすぐ後から真子との交際が始まったわけではない。彼女が完全に立ち直る為にはまだまだ時間が必要だったし、僕にしてみればそんな展開を考えること自体が無かった。けれど、それでも僕達の関係が、この日を境にして急がず焦らず深まっていったと言うことも、また事実だった。

僕と真子は沢山、話をした。と言っても、会話を進めるのはもっぱら彼女の役割で、僕はいつもそれを聞いているばかりだった。面倒だったとか言うのではなく、単に他者を楽しませられそうな話題が思い付かなかったのだ。「たまにはさ、あなたの方から話をしてよ」と求められ、「僕の話なんかつまらないよ」と答える僕に、彼女はよく「あなたの話だから良いのに」と言ってくれた。その度に僕は、何も言えずに苦笑した。「ごめん」と謝る事は、違う気がしていた。

告白をしたのも、真子の方だった。

「もう気付いているんでしょ」

その言葉に、僕は最初、「何が？」としか返せなかった。駆け引きや誤魔化しではなく、単純に分からなかったからだ。

すると彼女はそんな情けない男に仄かに呆れた表情を見せたものの、やがて「あなたらしいけど」と前置きしてから、告白した。「あなたの事が、好きなの」と。

僕はやっぱり僕だった。

しばらく間を置いて、「何とか言つてよ」と今度こそ呆れた様子で促してきた彼女に、喜ぶことも断ることも出来ずにただただ驚いていた僕は、ようやく「ありがとう」と返すことが出来た。

正直な所、ここで自分がそう言ったことこそ、ある意味では一番の驚きだったかも知れない。そんな展開、有り得ないはずだったのに。

真子は笑っていた。彼女の笑い方は、幾分か大人っぽくなっていた。それだけがほんの少しだけ、残念だった。

僕達は上手く行っていた方だった、と思う。喧嘩をしたりすることは無かったし、浮気をしたりすること何て想像さえしなかった。時間があれば二人で会って、ちゃんとお互いの顔を見ながら色んな話をした。あまり贅沢や派手な遊びは出来なかったけれど、それでも楽しげに喋る彼女を見てるのは、楽しかった。

そう言えば、いつだったか、彼女が一番最初に、僕に話し掛けてきた理由を聞いてみた事があった。返ってきた答は、「好きな漫画の登場人物に似ていたから」だった。

しかしながら、僕自身はその漫画を読んだ所でまるで共感する事の出来ない話だったし、現に他の誰にもそんな事を言われた経験も無いので、今ひとつ喜んで良いのかどうなのか微妙な所であったのは確かだ。謙遜でも嫌味でも何でもなく、単なる客観的な事実として、僕は漫画の中で重要な役割を与えられそうなほどの美青年や好青年では全く無い。ただ、密かに「異常者の役なら辛うじて出来るかも知れない」と皮肉めいた思いを抱きはした。

だが、そもその話をすれば、異常者を好きになる女性の気持ちなど共感出来るはずがなかったし、少なくとも僕なら遠慮したい。だから当然、彼女に本質を語るつもりなども無かったし、また僕自身も深く考えないようにした。今が楽しいのだから、それで良いと思っていた。

そう、僕は満足していた。真子にしたってそうだと思うっていた。問題と呼べるほどの問題なんて、一つも起こりはしなかった。

それなのに、いつの頃からだっただろう。彼女が妙なことを言い出すようになったのは。「ねえ。あなた、本当に私のこと、好き？」

特別なきっかけなど思い浮かばない。それでも彼女は何の前触れも、前置きもなく、急にそんなことを聞いてきた。僕は最初、それを甘えた冗談の一種だと思い、軽く笑いながら「好きだよ」と返した。

それでも、彼女はその問いかけを止めなかった。決して頻度は多くなかったけれど、かといって以前に聞かれた事を忘れているほど長い間隔を空けられてもいなかった。いつしか、僕にもそれが単なる言葉遊びでない事は感じられていた。

だからこそ、僕はいつもそれに「好きだよ」と即答した。心の底では「そんなことを聞かないでくれ」と願っていた。何よりも、彼女のことを「好き」でいたかったからだ。僕に疑わせないで欲しかった。

彼女は止めなかった。「ねえ。あなた、本当に私のこと、好き？」。

今以て、どうして彼女がそんな問いを繰り返す風になったのか、確実な事は分からない。けれど、同時にあの頃から間違いないだろうと分かっていた事は、その原因が僕にあったと言うことだった。きっと、必要以上に深く立ち入ろうとしない僕の態度が、彼女の目には酷く不誠実なものとして映っていたのだろう。当然だと言えば当然のことだった。

しかしながら、僕は何もしなかった。

やるか、やらないか。やられるか、やられないか。僕は「やらない」事を選択し、「やられない」事を望んだ。かつて彼女に対して偉そうに語った己を見事に裏切る結果であったけれど、構わなかった。いや、むしろ、そうするべきだとさえ考えていたかも知れない。いやいや、その実、何かを考えようとする事そのものを放棄していた気もする。自己矛盾など、苦にならなかった。今さら嘘を吐くことや誤魔化しを並べることに抵抗を覚えたりはしなかった。

「ねえ。あなた、本当に私のこと、好き？」

そう聞いてくる時の彼女はいつも、少しだけ大人びた笑みを浮かべていた。

「勿論、好きだよ」

そう答える時の僕もまた、常に穏やかな笑顔を見せられるように努めていた。

おかしな話かも知れないが、そんな既定事項めいた問答を含めて、僕達の付き合い方は一つの形として成立していた。

互いの部屋を行き来し、また時には一緒に外へと出掛け、必ず二人きりになれる時間を作っては、彼女が楽しそうに色んな話をして、僕がそれに微笑みながら相槌を打つ。時折、その話題の中に、例の質問と応答を混ぜながら。

言い訳に過ぎないと言われればそれまでだが、僕は彼女との関係を大切にしたかったのだ。事実、僕は幸せだった。とても幸せだった。



掛け替えのない彼女と共にいられるという喜び。触れ合える感動。

「ねえ。あなた、本当に私のこと、好き？」

僕は彼女のことを大切に想っていた。彼女だってそうだったのだろう。

「勿論、好きだよ」

それはもう愛し合っていると云っても良いとさえ思えるほどに。

「嬉しい。私、あなたに会えて本当に良かった」

そうだ。僕は本当に……

「僕こそ、君と出会えて、幸せだよ」

：そんな事を、心から信じていたと言い切れるのだろうか。

嘘に染まり、誤魔化しにも慣れ、いっそ自分自身すら偽り続けて生きてきた僕が、果たして本当に己の心などと言う曖昧なものの真実を見極めることが出来ていたのだろうか。

やはり、特別なきっかけなど無かった。それでも強いて挙げるなら、きっとそんな日常が当たり前のものに成りすぎてしまったのだ。希薄な僕の存在に溶け込みすぎてしまっていたのだ。もしくは、彼女の存在が大きなものに成りすぎたのかも知れない。

いつしか僕は考えるようになっていた。惰性で流れる安楽さを、幸福と錯覚しているだけではないのか。たまたま訪れた一時の気休めを、勝手に絶対のものとして美化してしまっているだけではないのか。こんなことを考えてしまう事自体、やはりこれが単なる虚妄に過ぎないと言う証拠ではないのか。そもそも、そのことを見抜いているからこそ、彼女はあんな疑問を抱いたのではなかったのか。

この幸せは、僕にとつて真実なのか。僕は本当に、彼女のことを愛せているのか。

：もう、止まらなかつた。

彼女とお揃いのマグカップを手から落としたりした時、心にまで亀裂が走って砕けたかと思つた。だけど、それが単なる「気に入りのカップを失った哀しみ」と違うという確証はなかつた。不注意だったと彼女に謝った時も、悲しそうなその姿を見て胸が痛んだけれど、それがただの憐憫や同情と一線を画している感情だという保証はなかつた。

だからこそ、僕は繰り返し返した。彼女が僕に対してそうしてみたみに。いつしか、僕達の付き合い方にもう一つ、新たな要素が加わっていた。

しかし、僕の心は一向に晴れなかつた。それどころか、むしろ壊せば壊すほど、核心から遠ざかっている気がした。壊せば壊すほど、期待していた確信はあやふやな可能性にちぎれてバラバラになっていった。

そして僕はある時、唐突に悟る。いつまで経っても望む結果が得られない理由を、だ。それらは所詮、代えの効くものばかりだったからだ。一つ一つがとても大切なものであったとしても、彼女がいれば、また幾らでも増やすことの出来るものばかりだったから。

最早、確かめるには絶対に代えの効かないものでなければならなかつた。僕が唯一、疑わなかつたのは、「壊せば分かる」という経験に基づいた方法だけだった。

やがて、真子の誕生日がやって来た。

僕は二人だけでは食べ切れそうにもない大きさのケーキと、以前から彼女が欲しいと言っていた指輪を用意して、部屋で待っていた。勿論、他の料理も僕が作っていた。

現れた真子は、前髪を少しだけ切り、眼鏡をコンタクトに変えていた。「似合ってるよ」と言うと、うっすらと頬紅に染まっていた彼女の顔が、さらに仄かな朱を帯びた。とても

可愛らしいと思ったから、抱き締めた。そして華奢な肩をきつく抱きながら、「僕はやっぱり、彼女のことを本心から好きなんじゃないだろうか」と考えていた。だが、そこで彼女が「痛い」と小さな呟きを漏らし、僕の思考は呆気なく中断させられた。結論はまだ出ていなかった。

「プレゼントがあるんだ」

ケーキ以外の食事をひとしきり楽しんでから、そう言って取り出した指輪を、彼女は息を呑んで見つめていた。僕はそんな彼女の顔を見つめていた。

やがて彼女がおずおずと左手を差し出す。僕は躊躇うことなく薬指にそれをはめた。小さなダイヤのあしらわれたピンクゴールドの指輪は、細い指にとても良く映えた。

彼女が「綺麗」と、囁くように言った。その瞳では、ダイヤに反射する光のごとく、細かな輝きが揺れていた。

僕は「喜んでくれて、良かったよ」と安堵の微笑みを浮かべてから、「一つ、聞きたいんだけどさ」と問いかけを発した。

「ねえ、僕、本当に君のこと、好きだと思う？」

彼女の笑みが凍りついた。

僕はもう一度、同じ問いかけをした。

彼女は一言も返してこなかった。魅力的な垂れ目が、大きく見開かれてまん丸になっていた。

僕は答の無かったことを幾分か残念に思いながらも、気を取り直して「ケーキを食べようか」と、ケーキを切って互いの皿に取り分けた。刃の長いナイフは切れ味良く、淡い黄色の断面には真っ赤な苺が綺麗に並んで浮かんでいた。

「美味しそうだね」

「……ええ」

ようやく、彼女が反応を見せてくれた。視線は、ケーキを見下ろしていたけれど。

「チョコレートのと悩んだんだけど、真子は苺のショートケーキの方が好きだろ」

「そうね」

「あ、でも、この店。チーズケーキも有名ならしいよ」

「そう」

「だけど誕生日ケーキにチーズケーキは、ちよつと違う気がしてさ」

「ねえ、そんな事よりー」

「僕はさ」

意を決した風に何かを言いかけた彼女を遮り、僕は微笑みを浮かべたまま、淡々と言った。「真子の事、好きだと、思うんだ」。

彼女は再び口を閉ざした。代わりに眼差しを向けてくる。

僕は真っ直ぐに見つめ返した。「真子は可愛いし、一緒にいると楽しいし、きっと僕は真子のことを大好きだと、思うんだ」。

「…それは、ありがとう」

「でもね」

「え？」

「正直に告白すると、自信がないんだ。僕は、本当に、ちゃんと、真子のことを大切に想

えているのかって」

「……………」

「そんなの、真子に対しても失礼だろ」

「…そうね」

「だから、確かめようと思ったんだ。ううん、確かめないとダメなんだよ」

「それって…」

「簡単だよ」

そして僕は笑った。目元をゆるめ、両頬を真横に引いて歯を見せた。「僕はいつだって、そうやって確かめてきたんだから」。笑いながら、クリームの残るナイフを手に取った。

「何を、するつもりなの」

意外なことに、真子はまるで怯まなかった。理解していないと言う雰囲気はなく、むしろ全てを分かった上でそこにいると言う感じだった。

僕はそれに少なからず拍子抜けというか、驚きを感じたものの、特に言葉を取り繕うこともなく素直に告げた。「真子をね、壊すんだ」。

彼女はやはり、平然としていた。「そう」。少なくとも表面上は。

「恐くないの？」

「怖いよ、当たり前でしょ」

「…うん。そうなの、かな」

「そうなのよ。それが普通なの」

「そっか、ごめん」

「良いわよ、もう。それに、何となく気付いてたし」

「気付いた？」

「あなたが、ちよっと変わってるって事によ。もしかしたら危険なんだとも思ってた」

「それなのに、どうして…」

彼女は逃げなかったのだろう。

「決まってるでしょ」

真子は「何を今さら」と言う風に溜息を吐いてから、「危ない人でも、好きなの。仕方ないじゃない」と笑った。それは僕の好き…だろうと思える笑い方だった。

「そんなの、変だよ」

「あなたが言うの？それも変よ」

「そうだけど」

「ねえ、一つだけ聞かせて」

「何を？」

「あなたは、私を殺したいの？」

「違うよ。そんなんじゃない」

「だったら、どうして」

「言っただろ。僕は、確かめたいんだよ。僕が、君を本当に愛せているのかどうかを」

「…：そう。そっか、ごめんね」

「何で真子が謝るのさ」

「私には多分、あなたを本当の意味で分かって上げることは出来ないみたいだから」

「うん…」

「でも、その代わりに、受け入れて上げることくらいは出来るから。あなたのしたいようにすれば良いわよ」

「…どうして」

「言ったでしょ。あなたの事を愛しているからよ」

僕は言葉を失った。

「あなたには、きつと私みたいな相手が必要なんだと思うし」

彼女は優しい眼差しを向けてきた。ただし、それは何かを堪えようとしているものにも見えた。「あなたこそ、恐いの？」。

「え？」

言われた意味が理解出来なかった。悪いとは思うし、酷いとは思うけれど、どうして傷つける側の人間が怖がるのだろうか。

すると彼女は「そっか、それも分かんないのか」と、小さく呟いた。

やはり僕には理解出来ないものだった。

彼女もまたそれを悟ったのだろう、それ以上に言葉を紡ぐことを止め、僕の方へ体を向けて、両腕を柔らかく広げて見せた。まるで、抱擁を待っているように。

彼女が目を閉じた。

僕は、ナイフを逆手に持ち替えて、振りかぶった。

痛がる姿を見るのは嫌だった。傷つけたいわけでも無かった。だから狙うべきは何処だろうかと考えた。首筋か、心臓か、腹は辛さを長引かせるだけだろう。

そして決めた、首にしようと。僅かに顎を持ち上げられ、むき出しになった白い首筋は、やけに色っぽくて女を意識させた。僕の思考を感じ取りでもしたのか、可愛らしい喉仏が小さく上下した。まるで、見る者を誘うかのごとく。

僕は遂に、手を振り下ろそうとした。

だが、その寸前、不意に視界の端を何かがよぎった。

反射的に動きを止めた僕は、首から上だけを回してそれを見た。細かな傷一つ無い真新しい指輪が、淡い輝きを放っていた。

けれど、僕の目に映っていたものは、それだけでは無かった。

丁寧に整えられた爪の先が、とても小刻みに震えていた。

今さらと言えば今さらだったが、僕は改めて思い知らされていた。やっぱり恐いのだ。すでに彼女本人に言われていた事実だけれど、それを確かなものとして実感したのはこの時が初めてだった。

瞬間、僕の中で色んな感情が渦を巻いた。

逃げてくれれば良いのと思った。大声で喚いて抵抗してくれてもいいのと思った。罵詈雑言を浴びせてくれてもいいのだし、いっそナイフを奪い取って刺し殺してくれてもいい。

それなのに、彼女はそれらの一切をしなかった。何も感じていないのではなく、震えが止まらないほどの恐怖を抱きながら、それを胸の中に押し込めて、僕を待っていた。

僕は唐突に悟った。この選択は、きつと間違いなのだと。

そして同時に思い至った。愛を確かめる方法は、もう一つある事に。

「ごめんね」

一向に訪れない凶行を不思議に思っていたのだろう、真子は僕の言葉にうつすらと臉を持ち上げた。

僕は笑った。心の底からそうしたかったからだ。もう一度、「ごめんね」と謝った。それから、わけが分からないとでも言いたげな顔をしている真子の前で、手を振り下ろした。

硬く薄い刃が、ほんの刹那だけ肉の壁の弾力を伝えてきて、直後にそれを突き破った。手の中でゼリーの塊を握りつぶしたら、少しは似た音を出せるかも知れない。筋膜が深々と貫かれる音は、体の中から響いているように聞こえた。痛みよりも、やけに重苦しい感覚に全身を襲われて、急速に腕と腹以外から力が抜けていった。

彼女が短い悲鳴を上げた。それから声を裏返らせて「どうして」と叫んだ。

僕は勝手に震えようとする喉を何とか制御して、「壊すのは、僕でも良かったんだ」と答えた。「失った時の絶望を知りたいのなら、僕を壊しても、同じだよ。結局、この関係が失われる事には変わりないんだから」。僕は腹からナイフを抜いた。

彼女は怒鳴った。「馬鹿じゃないの」と。そして両目から涙を溢れさせた。怒鳴りながら、泣きながら、彼女は必死に僕の腹を押さえてきた。どんどん流れ出す血のせいで、彼女の両手は真紅に濡れて、もう指輪は見えなくなってしまうていた。

僕は、また「ごめんね」と言った。それから激情で真っ赤になった彼女の頬を伝う涙を、空いている方の手を懸命に伸ばして、ぬぐった。彼女を泣かせたいなんて、そんなことは願っていなかったから。けれど涙は尚も彼女の瞳からこぼれ、さらに僕の愚行によってその頬には汚い血がべつとりと付いてしまった。だから僕はやっぱり「ごめんね」と言った。気付けば、僕もまた泣いていた。

彼女が「救急車を」と呟いて、立ち上がろうとした……が、直前で腕を掴んで止めさせた。恐ろしいくらいにの形相で睨まれたけれど、腕を放す気にはなれなかった。

なぜなら、一瞬たりとも彼女に離れて欲しくなかったからだ。僕は自分がもう助からないだろうと悟っていた。そしてその事実に関心と同時に、僕の中にはまた別の確信が生まれていた。

僕は死ぬ、きつと間違いなく。彼女とは二度と会えなくなり、話も聞けなくなり、触れることも出来なくなる。失うのだ、全てを。あれほど楽しかった、彼女との何もかも。心がえぐれたかと思つた。腹の傷など比にもならなかった。

彼女の言う通りだ。僕は馬鹿だった。どうしてこんなことになるまで気付けなかったのだろう。信じるも何も、僕は確かに楽しいと感じていたのに。そうでなければ、僕みたいな人間がわざわざ誰かを求めたりなんてするはずがなかったのに。

真子は泣きじゃくっている。僕も泣きしきっている。僕達は互いに正体無く泣き交わしている。だけど徐々に、僕の意識はぼやけてくる。

早く言わなければと思つた。今すぐにでも言わなければならぬ。そうでなければ何の為にこんな過ちを犯したのか、分からなくなる。

それなのに、頭ではそう思い、心でだってそう願っているのに、体はまるで言うことを聞いてくれない。全身は絶え間なく痙攣し、喉は勝手に暴れ、舌は知らぬ間に悶えている。とても簡単な一言が、まるで紡げない。

言わなければいけないのに。伝えなければいけないのに。何よりも、自分自身がそれを望んでいるのに。せめてそれだけでも成すことが出来れば、この人生にも僅かばかりの価値と意味を見出す事が出来るだろうに。

それなのに、止めどなく溢れ出るのは透明な涙と紅血ばかり。

真子は泣いている。こんな愚か者の為に泣いてくれている。

けれど僕はもう、泣くことさえ出来なくなっていく。

〈了〉